
ネコとネズミ

TRICK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネコとネズミ

【Nコード】

N6391V

【作者名】

TRICK

【あらすじ】

ネコに捕まってしまったネズミは助けってくれと懇願した末、命令に従ってくれば解放してやると言われた。ネズミは生きられると喜びました。

しかし、そこには残酷な運命がまっていた。

（前書き）

猫好きな人には申し訳ない描写があります。鼠好きな（？）人はある程度残酷ですので覚悟をもって読んでください。

とあるネコが街中の路上で這っている小さなネズミを捕まえました。ネズミは必死に抵抗しましたが、なにぶんネコが大きいものですから、

上から押さえつけられては動くこともできませんでした。

完全に支配権を勝ち取ったネコは威張って言いました。

「うまそうなネズミだ。」

ネズミの背中をペロリと舐めるだけでもネズミは身震いしました。

ネズミは食われたくない一心か必死に必死にと懇願続けました。

「ああ、お助けを。食わないでください。私には妻と7匹の子がいるのです……」

「妻と子供がいるのか？ そいつらもネズミなのか」

「はい。あなたに良心のかけらが残しているのなら」

この弱い私めにお情けをかけてください。私は家族を守らないといけません」

その言葉を聞いたネコは少し考えるように顔を空に見上げました。

そして、考えをまとめたのか意地の悪い笑顔でこう言いました。

「よし。食われたくなかったら俺の命令を聞いてもらおうか」

「分かりました！ 何でもしますのでどうかお命だけは……！」

「よからう。俺様の命令を最後まで聞いた時にはお前を解放しよう」

ネコはネズミを解放しました。ネズミは生き伸びられ喜びました

まだネコから解放されたわけではありません。ネズミは気を引き締めました。

「それで私は何をすればよろしいのですか？ 私達ネズミは専ら忍びこむことを得意にしています」

「そうだな。そこらへんの人間の家に忍びこんで食べ物を盗んでもらおうのも

悪くはないな。しかし、俺が求めているのはそうじゃないのだ」

ネズミは首を傾げました。

「それじゃあ、手始めにお前の家族を全員ここに呼び寄せてもらおうか」

これにはネズミは驚きました。そして、再びガタガタと体を震わせました。

「そ、それだけはお勘弁を……」

この言葉にネコは鬼の様な形相を見せました。

「今、この場で食われたいのか！命令には従うと約束した事を忘れた訳じゃないだろう！？」

「ヒイイイ！分かりました！連れて行きますからどうか怒らないでください」

「俺の気が変わらない内に連れてこい。逃げようなんて考えるなよ

……」

ネコは顔を近づけてネズミを脅しました。

ネズミは悲しそうな背中を見せました。

途中で逃げようと思ったネズミでしたが、

後ろにはネコがひっそりと付けていたから

大人しくネズミの妻と子供たちを連れて行きました。

わずかでも生きる望みがあればいいと只願うだけでした。

子供たちはまだ見ぬネコを見て、不思議がっていました、

妻は顔を真っ青にして、震えていました。

ネズミはそれを優しく抱いて、気を落ち着かせました。

そして、ボーツと突っ立っているネコに問いかけました。

「さあ、連れて行きました。次は何をすればいいのですか？」

次はどんな命令をされるのだろうか——一同固唾を飲みました。

ネコは沢山いるネズミたちを見て、満足してから次の命令を下しました。

「次の命令だ。お前達にはあの家に忍び込んでもらおう」

ネコが指をさす所には人間がくらしている一軒家がありました。

ネズミたちは忍び込むのは得意だったので簡単に侵入できました。

ネコは開いていた窓から家の中に入り、すぐに命令を下しました。

「俺に付いてくるんだ」

ネコは家の中を歩き始めました。ネズミたちも不安げにネコの後に続きました。

向かった先は食べ物が豊富にある台所でした。

とても良い匂いがネズミたちの鼻を刺激しました。

思わずヨダレが垂れそうなこの場所でネコはどうするつもりなのでしょう

食べ物を取っていくのだったら自分達でも十分だというのに何ででしょうか

しかし、いくら考えてもネズミには分かりませんでした。

「ちようど良い！」

ネコは身軽に流し台に上がり、ガスコンロに置いてあるフライパンをそつと覗きこみました。

フライパンには未使用の油がとつぷりと入れられていました。隣にはパン粉がありました。

台所には人の姿はいませんでした。恐らく、パン粉に付ける素材を買い忘れたのでしょう。

ネコは油とパン粉を同時に見てから意地の悪い顔を見せるネコ、それを見た男ネズミは背筋に冷たい物を感じました。

「ネズミたち！ここまで来るんだ」

ネコが何を考えているのか全く分からないネズミたちは解放されたままに従うしかありませんでした。

流し台は表は長年油を浴びているせいでツルツルと滑るので裏の方からネコの所まで登りつめました

「ここに並べ」

ネコはネズミたちの目の前にパン粉が入った容器を押し出してからこう命令しました。

「お前以外は全員この容器の中で遊べ」

ネコはネズミ以外のネズミたちを容器の中に入れと言いました。

子供たちは純粹だったので容器の中に入ってパン粉をかけ合いました。

ネズミたちがパン粉で戯れている間、ネコはこっそりとガスコンロの火を付けました。

この動きをネズミが見ていましたが、台所のことを何も知らない彼にとって

ネコの動きの意味を理解はできませんでした。しかも、ネコが何故、自分の家族に

パン粉を付けるのかその意味すら知らなかったのですから無理もありません。

ネコがガスコンロを点けた間にネズミたちの体はパン粉まみれになっていました。

「よし、ネズミたちよ！体に十分に付けたな」

ネコはパン粉まみれのネズミを見て、満足した表情でいました。

「最後の命令だ！これで解放してやる」

ネズミは大いに喜び、勇んで何をすればいいと言いました。

ネコはネズミのその反応におかしくてたまりませんでした。

笑っては怪しまれるのでまだ笑うなと自分に言い聞かせました。

「最後の命令……それは」

そう言いかけるとネコはネズミの家族が入った容器を両手で掴みました。

「な、何をするのですか！」

「最後の命令はこのフライパンの中で泳げ」

ネズミが抗議をかける間もなく、パン粉にまみれた家族たちは沸騰した油の中に落ちて行きました。

ネズミたちは熱い、熱い、助けて、お父さんと鳴き叫び、フライパンから這い上がろうとしましたが、

残忍なネコによって幾度無く蹴り落とされました。家族たちは声が枯れるまで懇願し続けました。

体の感覚が無くなり、手が溶けてまでも生きたいとしたが、やがて

悲痛と懇願の声は無くなりました。

後に残ったのはネズミの虚無感漂う独り言だけが台所に響きました。
「何で、何で、何で、何で、守れなかった、守れなかった、守れなかった……」

ネコはフンと鼻で笑って、にんまり笑顔でフライパンの中を覗きました。

そこにはコンガリ焼けて“おいしそう”なネズミたちの姿がありました。

ネコは実に満足そうな顔をしてから、虚無感に浸っているネズミに言いました。

「お前を解放してやるぞ。良かったな。お前だけが生き残れて家族もきつと本望だろうな」

「そ、そんなヒドイ……」

「ヒドイ？ 約束は破ったわけじゃないだろう？」

約束どおりお前を解放したじゃないか

それにこれは自然の理だ。ネコがネズミを食うのはヒドイのだったら、

虫などを食べているお前たちネズミも同じ事が言えるのじゃないか？」

ネコは真顔でこう言った。ネズミは反論はできなかった。

しかし、ネズミの言葉が気に喰わなかったので追い打ちをかけてみた。

「それにヒドイのはどっちだ？ お前が俺のことをヒドイ奴だと罵るなら

家族を守れずにただただボーツと突っ立っていたお前は何なんだ？」

「え？」

「もし、お前が俺の企みを知っていたなら俺に反逆していたか？」

フン！ そんな勇氣、薄汚いネズミ如きが持っている訳が無い！」

「うつ……」

ネズミは何も言えなくなり、うつむきました。

しかし、ネズミは悔しさに頭の中に怒りでいっぱいになりました。

「フン、憶病なネズミだ。さてと俺は食事の時間にするからさっさとしつぽ巻いて帰れ

それとも家族と一緒にいるか？まあ、お前ごときじゃあそんな希望も勇気もないか。ハハハハハ！

何だその薄汚いその目は弱い目だ。そんな奴がよく家族を持とうと思ったものだな」

ここまで言われるネズミは腹が立ってしまいます。

どうにかこのネコに自分の勇ましさを示してやりたくまりました。

しかし、憶病な彼は弱っちいのでネコに奇襲で襲いかかってもすぐに負けてしまいます。

このままトボトボと帰ってもあのネコの記憶に自分の憶病さを一生刻まれるでしょう。

そこで目につけたのは家族が入っているあのフライパンでした。

そうだ。自分もあそこに入ればこのネコに憶病と言われずに済むぞそう考えましたネズミは意気揚々と沸騰しているフライパンの中に入りました。

フライパンの中は暖かくて、それに家族も一緒だったので怖くはありませんでした。

しかし、やっぱり熱いもので悲痛な悲鳴をを最後にネズミはコロッと揚げられました。

一部始終を見たネコは冷笑しました。

「バカなネズミだ。俺様の作戦にまんまとかかりやがって……」

ネコは男ネズミを解放する気なんてさらさらありませんでした。

ただ、ネズミがこんな状態の時、どんな反応を見せるかを見たかったのです。

結果はネコの予想通り、フライパンの油の中に入り、揚げものになつてくれました。

憶病者と罵られた時、女はともかく男としては許し難い言葉である。

そんな時に取るべき行動は逃げるか勇気を見せるか二つに1つです。だからネコはわざと酷く罵りました。結果としてネズミの勇気を奮い起こせました。

「グフフ！勇気を持つのは良い事だ。しかし、間違った方面に勇気を奮い起すのはただの大馬鹿者だ」

ネコは揚げたネズミたちを皮肉めいた笑みをしながらがむしゃらに食べました。

結局、ネズミの行動は馬鹿な行動を取っただけで終わり、ネコからは勇ましいネズミと呼ばれずに大馬鹿なネズミと記憶に一生刻みましたとさ……。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6391v/>

ネコとネズミ

2011年10月9日13時19分発行